

韓国百寿者に関する社会的関心と課題

Trends and Issues about Centenarians in Korea

金 惠媛

KIM, Hyeweon

〈要旨〉

本稿は、近年の韓国百寿者に関する社会的な関心と研究課題について考察したものである。「100歳時代」、すなわち超高齢社会に対するリスク認識や老後準備を促す世論形成、そのため省庁・政府研究機関横断プロジェクトとしての取組が推進されたこと、それに対する社会的関心のあり方について検討した。また、既存の研究分野では長寿要因を解明するアプローチが多かったが、最近では、生活者としての百寿者に研究関心が移行しつつあることが確認できた。さらに、超高齢期に対する社会認識の形成や老後準備を具体化するためには、当事者である超高齢者の生活意識と実態についての発信、基盤整備が必要であることが確認できた。

본 연구는 최근에 급증하고 있는 백세인에 대한 사회적 관심과 연구과제에 대해 고찰한 것이다. [100세 시대], 즉 초고령사회에 대한 위기의식과 노후준비를 위한 공론을 형성하기 위해 중앙부처 및 연구기관이 공동 진행한 사업에 대해 검토했다. 백세인에 관한 연구동향과 사회인구적 실태를 검토한 결과, 기존에는 장수요인을 규명하는 연구가 많았으나, 최근에는 백세인의 생활실태 및 장수문화로 연구영역이 확대되고 있음을 확인했다. 같은 맥락에서 초고령기에 대한 사회적 소통과 노후준비를 구체화시키기 위해서는 당사자인 초고령자의 생활의식 및 실태에 대한 발신의 장이 형성되어야 함을 확인했다.

キーワード：100歳時代 超長寿社会 生涯現役時代 老後準備 当事者認識
超高齢者からの発信

はじめに

2011年、韓国社会においては、「100歳時代」元年と言っても過言ではないほど百寿者についての関心が高まった。「100歳時代」が主要国政課題の1つとして位置付けられ、中央省庁・政府系研究機関の横断プロジェクトとして取組まれたのである。これは、急速に進む高齢化、とりわけ高齢人口の高齢化、100歳以上人口の急増、そしてベビーブーム世代の定年開始など、近年の社会人口的な変動に対する対応の一環として解釈できる。超高齢社会化を社会全体で取り組むべき懸案課題とし、「準備された」高齢期・高齢社会を目指すものである。「100歳時代」を実現性の高い将来像として位置付け、「80歳時代」の枠組みで設計・運営されている現在の生活設計、社会システムに警鐘を鳴らし、見直しを促すものである。

最近まで百寿者についての大衆的、学問的関心は比較的低い水準に止まっていた。大衆的関心は、「健康エリート」の象徴として「百歳」という言葉が用いら

れる程度であり、現実感覚は希薄であった。しかし最近では、健康長寿について人々の関心が高まり、百寿者の生活習慣などが注目されるようになった。学問領域においても遺伝学や医学、栄養学分野を中心とする長寿要因解明の研究のみならず、百寿者のQOL向上に着目した調査研究にも重点が置かれるようになってきた。

このような多様な主体、領域にみられる「100歳時代」への関心や取組みは、超高齢期を生きる当事者の生活自立と老後準備に目的を置くものであり、従来の関心との差別化を図るものである。そこで本稿では、韓国百寿者の社会人口的な現状を捉えるとともに、百寿者に対する大衆的関心について検討していく。

1. 「100歳時代」到来に関する社会的関心

「百歳健康スペシャル」¹、「百歳健康特別市」²という用語からわかるように、100歳という言葉は健康長寿の目標、いわば象徴的意味で用いられることが多

かった。しかし最近では、漠然としたイメージではなく、実現可能性の高いライフステージとして認識されつつある。韓国の高齢率、つまり総人口に占める65歳以上人口の割合は、2010年現在11.0%であるが、2030年には24.3%、2050年には38.2%に達し³、日本やイタリアを上回る世界最高齢国になると推計されている。65歳時の期待余命に着目すると、2009年現在、男性は17.0年、女性は21.5年であり、80歳時のそれは、各々7.5年、9.8年となっている⁴。この数値には、自分の人生として長い高齢期を想像させ、その先が100歳につながっていることを実感させる説得力がある。2010年からベビーブーム世代が大挙して定年を迎えるようになったことも⁵、100歳時代到来に対する危機意識に拍車をかけている⁶。

「100歳時代」に対応した動きがもっとも早くから表れたのは健康、経済保障の分野である。「未来エステイト引退教育センター」は⁷、2011年度の引退市場に影響を及ぼした7大キーワードの1つとして、「100歳時代」を挙げている⁸。同センターでは、2011年は「老後準備についての認識が質的に転換された年」であると位置付け、「勉強-就業-引退」という人生80年時代の生き方から、人生100歳時代に適した「勉強-就業-勉強-再就業」という循環型の生き方にシフトすべきと提言する。さらに、老後準備度によって高齢期生活の両極化が広がっている現状を指摘し、公的年金と退職年金の他に私的年金を準備するなど、多様な収入源を確保することを勧める。

その他に、100歳までの医療保障をキャッチコピー

とする金融商品が続出し、支持を得ている。保険の保障期間をめぐるパラダイムの転換が進められているのである。例えば、1つの保険で家族3世代の高額治療費を100歳まで保障するという家族単位の保険商品は、販売開始3カ月で30万件以上の契約を結び、入院や手術費、癌、脳卒中、急性心筋梗塞等の疾病診断費をそれぞれ100歳まで保障するという商品も人気が高い⁹。多くの損保、生保会社が100歳までの保障を前面に掲げているのである。定年設計と関連する金融商品を取扱う部署名を「100歳時代研究所」と改称した「ウリ投資証券」の事例は¹⁰、80歳時代から100歳時代へのシフトを象徴的に表すものである。さらに保険産業のシンクタンクである「保険開発院」では、「現在の100歳保障保険は急速な高齢化による保障ニーズの増加に対応するには限界がある」と指摘し、全保険会社の統計を利用、算出した参照危険率を110歳以上の保障まで拡大するよう勧めていくと発表している¹¹。

保険業界同様、新聞や雑誌、ラジオ、テレビ等のマスメディアによる百寿に関する特集も続いている¹²。なかでも、朝鮮日報が2011年に新年特集記事として連載した「100歳ショック 祝福か災難か」は、多様な観点から百寿についての総合的な検討を試みた事例として注目される¹³。100歳時代に求められる個人レベルでの備えや社会全体の環境整備について、日本をはじめとする高齢先進5カ国での実態を援用しながら、クロスメディア（新聞、ケーブル放送、インターネット）で発信している。全15回にわたる連載の主なテーマをみると、健康及び食生活（3回）、高齢期におけ

¹ 韓国「SBS放送局」の健康生活に関するテレビ番組である（2004年10月～現在に至る）。「百歳」は、健康、長寿を象徴する言葉として用いられている。

² 2011年度ソウル特別市自治区保健所インセンティブ事業評価項目の一つ。その他の評価項目としては「男女健康特別市、学校健康特別市、健康安心特別市（危機対応）、健康安心特別市（精神健康）、健康安心特別市（医療安全）、赤ちゃん健康、健康未来特別市」等がある。http://www.jeonmae.co.kr/helper/news_view.php?idx=489024

³ 統計庁（2011a：5）。

⁴ 上掲書（2011b：14）。

⁵ 韓国におけるベビーブーム世代とは、1955～1963年生まれの172万人を指す。

⁶ 多くの韓国企業が55歳定年制を実施しているが、年金支給開始年齢は60歳である。さらに、2013年からは、5年毎に1歳ずつ上げられることが決定しており、定年から年金受給開始までの10年間、いわば「5565世代」は経済的に不安定な時期である。自身の定年家族での子ども役割、生殖家族での親役割が増大するハザマの年齢層といえる。

⁷ 「未来エステイト引退教育センター」は、韓国の代表的な資産運用会社である「未来エステイト」金融グループの傘下機関で、高齢化時代の効率的資産管理を目的に設立され、主に引退及び投資コンテンツ開発、退職年金に対する投資教育などを行っている。<http://www.miraeasset.co.kr/contrib/invInfo.jsp>

⁸ 「2011年引退者が知っておくべき7大キーワードは？」『引退と投資』（2011年12月号、Vol.18）未来エステイト引退教育センター、「京郷新聞」（2011年12月6日）より再引用。

http://news.khan.co.kr/kh_news/khan_art_view.html?artid=201112062113205&code=920100

『引退と投資』（2010年7月創刊）は、老後準備のための投資と資産管理、引退後の生き方など、ライフスタイル全般にかかわる老後の準備方法をメインのテーマとして取り扱う月刊誌である。創刊号には「老後大乱、危機のベビーブーム世代」に関する特集記事が掲載されている。

る社会的役割及びネットワーク（3回）、経済生活（2回）の他に人口推計、社会サービスや地域の役割などが取り上げられている。超高齢期に想定されるリスクを列挙し、早期からの備えを促す内容構成となっており、100歳時代到来に対する韓国社会内の不安や関心の高さがうかがえる。

2. 「100歳時代」プロジェクト

このように社会的関心が増大した背景として、百寿者の量的増加や高齢期生活に対する危機意識の高まりは勿論であるが、韓国政府が100歳時代に対して政策的取組みを始めたことを忘れてはならない。李明博大統領は2011年の新年演説(1月3日)において、「もはや人生100年を基準に考える時代に差し掛かった」とし、「高齢化とは単純な期待寿命の延長」ではなく「生き方の質的变化」を意味するのであり、「すべての国家政策の枠組みもそれに適した形に変えていかなければならない」と力説した¹⁴。これを受けて、「100歳時代に備える低出産・高齢化社会フォーラム」（2011.3.22）¹⁵、「100歳時代プロジェクト」タスクフォース（TF）等¹⁶、80歳時代から100歳時代への移行を図る基盤の調整に向けての多様な政策検討が行われている。

「100歳時代プロジェクト」は、「自立支援」、「機会均等」、「参与」、「世代間共生」という共生4原則に従い、「100歳時代の到来及び波及効果」、「政府政策の評価」、「外国の100歳時代対応状況」、「100歳時代準備のための推進戦略及び政策課題」、「100歳時代準備のための公論化・広報案」等が主な課題と設

定されている¹⁷。企画財政部、保健福祉部、女性家族部、金融委員会、雇用労働部などの10の中央省庁と、副総理傘下のシンクタンクである「経済・人文社会研究会」を始めとする11の政府系研究機関の連携による取組みである¹⁸。課題や関係者の規模から、100歳時代に適した社会づくりが、韓国政府挙げての重要課題として本格的に始動していることがよくわかる。

引き続き、2011年6月に発表された「李明博政府の100大政課題」には、「一人ひとりに適した福祉を実現する」（戦略No.10）という戦略が含まれている¹⁹。李大統領は、「安楽な老後生活を保障」するための具体的な課題の1つとして、「100歳時代の社会変化及びQOL先進化の総合対策」（課題No.49）を12月上旬までに検討するよう企画財政部に指示した²⁰。また、保健福祉部では「100歳ヌリ（韓国老人人力開発院運営）」ポータルを2011年7月18日に開設し、生涯現役生活をサポートする事業を始めている²¹。同年12月には、「100歳時代の到来の意味と備えの重要性について国民的関心を一層高めること」を目的に、「100歳時代総合カンファレンス」が開催された²²。この学術会議は、「準備された人生100歳！心配NO、幸福ON！」というキャッチフレーズを掲げ²³、家族、地域、産業、金融など多様な観点から100歳時代への備えを呼びかけるものであった。

政府が老後の準備を強調していることから推測できるように、100年長寿に対する人々の展望は決して明るくない。保健社会研究院が2011年6月、全国の30～69歳の男女1000名を対象に実施した「人生100歳時代対応国民認識調査結果」によると²⁴、長寿はもはや

⁹ 「連合ニュース」（2011年12月13日）。http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/12/13/2011121300361.html

¹⁰ http://biz.chosun.com/site/data/html_dir/2011/09/15/2011091500393.html

¹¹ 保険開発院（2011）。

¹² KBSメディア（2005）「サイエンス21、長寿に関する科学的真実 第4部長寿の鍵、百歳人」（2005.12.3放映）、KBSメディア（2009）「大韓民国100歳人、彼らの長寿 幸福」（2009.11.11放映）、KBS第1ラジオ「超高齢化社会を準備する」（2011.10. 5～7日）等。

¹³ 原題は「100세쇼크 축복인가 재앙인가」で、全15回の連載（2011.1.3-2.19）である。

http://news.chosun.com/inside/track/art/old_index/201101/01/index.html

¹⁴ 「2011年新年演説」[http://www.president.go.kr/kr/president/speech/speech_view.php?uno=500&article_no=2&board_no=P04&search_key=&search_value=&search_cate_code=&order_key1=1&order_key2=1&cur_page_no=1&cur_year=2011&cur_month=01\(青瓦台\)](http://www.president.go.kr/kr/president/speech/speech_view.php?uno=500&article_no=2&board_no=P04&search_key=&search_value=&search_cate_code=&order_key1=1&order_key2=1&cur_page_no=1&cur_year=2011&cur_month=01(青瓦台))

¹⁵ http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/03/22/2011032201015.html

¹⁶ 「政府、「100歳時代」政策開発着手」

http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/08/24/2011082400319.html

¹⁷ 同上。

¹⁸ http://www.nrcs.re.kr/webmodule/homeboard?board_id=press&act=view&nowpage=1&category_id=null&article_seq=82（経済・人文社会研究会:National Research Council for Economics, Humanities and Social sciences）¹⁸ http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/08/15/2011081500173.html

人類の願望ではなくなりつつある。同調査では、90歳あるいは100歳以上生きることについて「祝福である」28.7%、「まあまあである」28.0%、「祝福ではない」43.3%という結果がみられ、その理由としては、「老年期が長すぎるから」38.3%、「老人問題（貧困、疾病、疎外、孤独感等）が発生するから」30.6%、「子世代に負担をかけるから」24.1%の順に続く。身体的、経済的に自立しにくく、社会的にも孤立しやすい期間を長期にわたって営為しなければならないという負担感、高齢期準備に対するストレスや不安心理がよく表れている。参考までに老後準備度についてみると²⁵、2009年現在、65歳以上高齢者のうち「老後準備ができていない」と回答した高齢者は主な理由として、「準備する能力なし」54.4%、「子供に委託」39.5%を挙げている。現在の定年制度（55～60歳）から単純計算すると、100歳時代では、生活資源や生きがいを現役引退から40年以上保持することが求められる。韓国社会の「高齢化、両極化」が進むなか、長期にわたる高齢期準備に対するストレスは、今後、増大していく可能性が高い。「100歳時代プロジェクト」は、老後準備度の低い韓国の現状を認め、超長寿時代に適した水準に改善していく、社会全体として図っていくとする取り組みなのである。

3. 超長寿者からの発信環境の整備

「100歳時代」について、長寿リスクや負担といっ

た偏向的な見方が支配的な原因の一つに100歳として至るまでの過程についての身近な、具体的なイメージが不足していることを見過ごしてはならない。「100歳時代」という言葉がもてはやされた2011年にも「当事者の声」が注目されることはほとんどなかった²⁶。事実、百寿者に関する実態調査や報道をみると、元気に日常を営為している百寿者が「意外に多い」という「発見」が述べられていることが多々ある。100歳以上人口の総人口に占める割合は2010年現在0.17%に過ぎず極めて少規模の人口集団である。そのうえ、健康状態や活動できる場が少ないため、百寿者の社会的役割が注目されにくいという百寿者特有の状況があることは否めない。しかし100歳時代へのパラダイムの転換は、現在百寿を営為している当事者の生活実態と意識を明らかにすることから始められよう。

韓国社会が100歳時代へと軟着陸を図るためには、百寿者にどのような役割が期待できるのだろうか。また、現在の百寿者はいかなる日常を営為し、自らのQOLの向上のために社会に対していかなるニーズを持っているのであろうか。百寿者からの発信を活性化する環境作りの先事例として、日本の「にっち倶楽部」の活動に注目したい。「にっち倶楽部」は、高齢者に居心地のいい場所を提供すること、親世代の老いから自らの老いを想像し準備することを目的として、1999年3月に活動を開始した特定非営利活動法人である²⁷。『にっち倶楽部』（季刊）の発行とHPの運営、高齢者の集いを主催している。『にっち倶楽部』には、「100歳の肖像」というコーナーが設けられ、百寿者のインタビュー記事が毎回掲載

¹⁹ 「一人ひとりに適した」は、原文では「맞춤형」となっている（青瓦台、2011.6：35）。

²⁰ 上掲書。

²¹ http://www.mw.go.kr/front/al/sal0301vw.jsp?PAR_MENU_ID=04&MENU_ID=0403&CONT_SEQ=257707&page=26（保健福祉部）

²² http://www.mosf.go.kr/news/news01.jsp?boardType=general&hdnBulletRunno=60&cvbnPath=&sub_category=&hdnFlag=&cat=&hdnDiv=&select=subject&keyword=100%EC%84%B8&hdnSubject=100%EC%84%B8&date_start=2011-12-01&&actionType=view&runno=4011363&hdnTopicDate=2011-11-27&hdnPage=1（企画財政部）

²³ 企画財政部が公募した100歳時代スローガンの大賞受賞作（2011.10.5）である「準備された100歳、幸せな100歳」を標榜する副題であり、先行きの不透明な100歳時代対策に臨む政府の姿勢がよく表れている。http://www.mosf.go.kr/news/news01.jsp?boardType=general&hdnBulletRunno=60&cvbnPath=&sub_category=&hdnFlag=&cat=&hdnDiv=&select=subject&keyword=100%EC%84%B8&hdnSubject=100%EC%84%B8&date_start=2011-12-01&&actionType=view&runno=4010812&hdnTopicDate=2011-10-05&hdnPage=1（企画財政部）

²⁴ http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/08/15/2011081500173.html

²⁵ 統計庁（2011c：28）。

²⁶ マスコミ報道や実態調査において百寿者のコメントが部分的に引用されることは確かにある。しかしそこから、百寿者のライフストーリーのように百寿までの過程、超高齢期の日常を網羅的に捉えることは難しい。

²⁷ 「創刊のことば」（にっち編集室、1999.7：22）。

²⁸ 創刊号（1999年7月）から2011年冬号まで、全65巻が発行されている。

されている²⁸。「地域密着・参加する中高年の情報誌」というキャッチフレーズが示唆するように、医師の日野原重明氏（1911年10月4日生れ）、教育学者の鼻地三郎氏（1906年8月16日生れ）のような有名百寿者のみを取り挙げられるのではなく、いわゆる「ご近所」の百寿者がクローズアップされている点が特徴的である。内容は現在の生活状況に中心を置きながら、家族や仕事、健康管理や趣味、地域活動など、百寿に至るまでのライフストーリーが当事者の語りとして構成されている。被扶養者の姿ではなく、「生活者」としての百寿者の「いま」にフォーカスが当てられているところは特記すべきであろう。伝達媒体という点でも、季刊誌のみならずインターネットのホームページにも公開しており²⁹、百寿者情報にアクセスしやすくする工夫が見られる。この「100歳の肖像」というコーナーは、百寿に至るまでの人生過程を覗く臨場感や説得力に富んでおり、「人生100年」のイメージを具体化する上で極めて有効である。まさに百寿者に期待される社会的貢献を具体的にサポートする実践的な試み、装置にほかならない。

百寿を生きる当事者の日常に着目した発信、とりわけ当事者の語りとして提供する試みは、様々な角度から行われていくべきであろう。韓国の場合、一般的に教育経験が少なく識字率が低いという百寿者の世代特性から、自分を語ることに不慣れな人が日本に比べ相対的に多いかもしれない。とはいえ、100歳時代のリスクと長期にわたる準備という負担面ばかりがクローズアップされては、百歳時代への総合的な展望は生まれにくい。韓国において、より肯定的で、実態的な将来ビジョンを描くうえで、百寿者の「これまで」と「いま」を多様な角度から可視化することが求められている。

4. 韓国百寿者の社会人口学的状況

前述の「人生100歳時代対応国民認識調査」において、希望する寿命について尋ねたところ、80歳代が59.3%で最も多く、70歳代20.9%、90歳代7.8%、そして100歳以上は8.2%を占めるに止まっている³⁰。しかし、高齢率及び平均寿命の高まりは急速に、確実に進んでいるのであり、超高齢期生活に対する心構え、備えは社会的課題である。以下、主に統計庁のデータを手がかりに百寿者の人口社会的現状についてみていく。なお、統計庁（2006、2011c）のデータを援用、作成した図表に関しては、資料の明記を省略する。

(1)百寿者の社会人口学的実態

韓国百寿者の人口数は、人口住宅総調査の結果から得られた100歳以上人口全数に対する実態確認の過程を経て、確定される。百寿者世帯への訪問面接調査を実施し、人口住宅総調査の調査時点（各年11月1日現在）を基準に個人特性（実年齢、婚姻状態、そして百寿者数が受けた教育年数等）について確認する。実年齢を確定するために、実際の生年月日（陽・陰暦）、満年齢、干支、初婚年齢、第1子の年齢と出産年齢、末っ子の年齢と出産年齢、そして解放時（1945年8月15日）の年齢についての補助質問が行われる³¹。健康状態及び生活習慣、就業歴、家族状況等については、面接調査時点における実態を捉えることになる。

表1をみると、2000年から2010年までの10年間において、百寿者総数は934人から1836人へと倍増し、人口10万当たりの人数も2.0人から3.8人へとほぼ倍増している。とりわけ後半の5年間における変動量が大きい。性別では女性が圧倒的多数を占めているものの、時系列にみると男性の増加幅が大きいことが認められる。なお統計庁によると、2070年頃、韓国の高齢率（44.3%）と百寿者の割合（総人口の1.24%、高齢人

表1 100歳以上高齢者数の推移（2000～2010年）

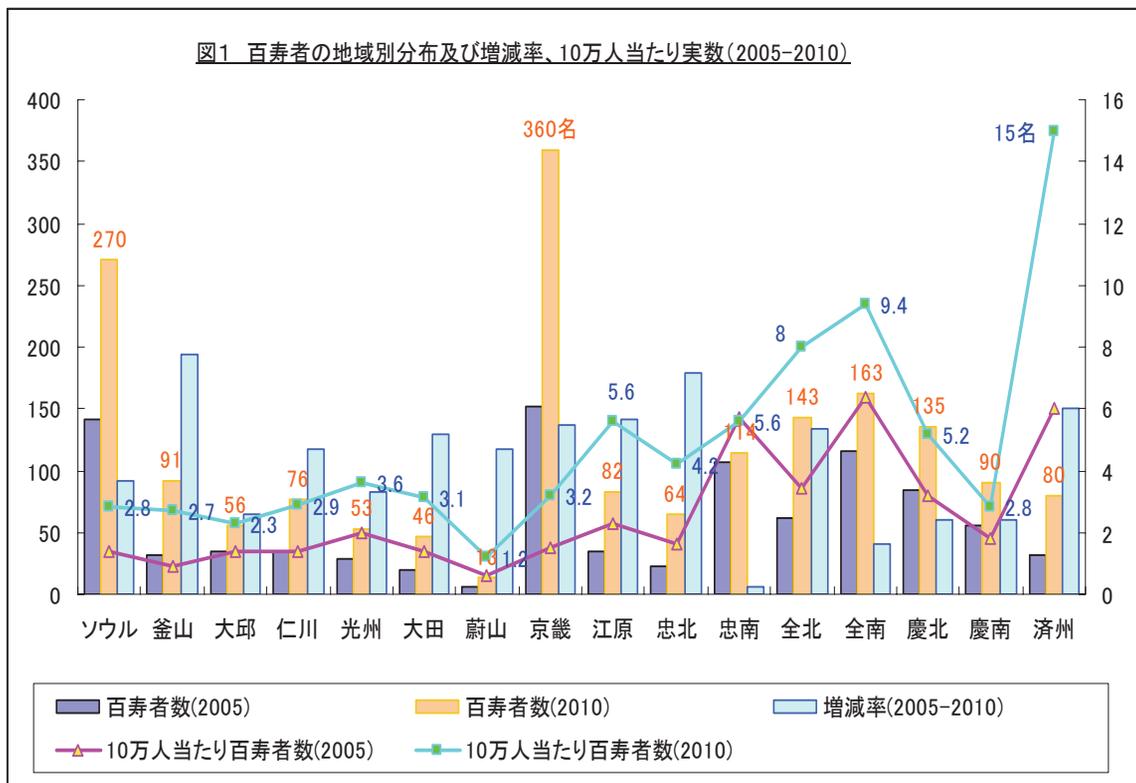
| | 2000年 | 2005年 | 2010年 | 2000～2010変動値 |
|--------------------------|-----------------|-----------------|-------------------|---------------|
| 計 | 934名 | 961名 | 1,836名 | 902名（96.6%）増 |
| 男性 | 82名 | 104名 | 256名 | 174名（212.2%）増 |
| 女性 （100歳以上人口総数に占める割合） | 852名 （91.2%） | 857名 （89.2%） | 1,580名 （86.1%） | 728名（85.4%）増 |
| 人口10万人当たりの100歳人口 | 2.0名 | 2.0名 | 3.8名 | 1.8名（90%）増 |

口の1.83%) がともにピークに達すると推計されており、高齢人口の高齢化は今後も続く様相を帯びる³²。

百寿者の地域別分布をみると(図1)、2010年現在、特・広域市に33.0%に当たる605名が、道地域に67.0%の1231名が居住している。同じく京畿道に19.6%の360名、ソウル特別市に14.7%の270名、そして仁川広域市に4.1%の76名と、百寿者の約4割が首都圏居住者である。総人口の地域規模別分布(2010年現在)についてみると、特・広域市居住者が46.1%、首都圏居住者が49.1%を占めている³³。いずれの地域区分でも母集団の比重に対し百寿者のそれは低い。しかし、実数の面では大きな集団であり、生活実態への注目が必要であることは言うまでもない。人口10万人当

たりの百寿者数の上位地域をみると、済州道が15.0名で最も多く、その後を全羅南道が9.4名、全羅北道が8.0名と続き、産業都市である蔚山はいずれの年においても最下位地域となっている。

統計庁の百寿者データを手掛かりに長寿地域指標について考察した金(2007;2010)は、寿命に影響を及ぼす社会的要因として居住地域の社会環境要因に注目する。長寿指標は、大気や水質等の環境汚染程度、道路舗装率とは負の関係、にんにくや豆の生産量とは正の関係を示し、このことが済州島の高い長寿指標につながっていると説明する。一方、65歳以上の生存率はソウルが最も高いが、これは、首都圏において救急医療体系や医療資源基盤が整備されていることが影響している



²⁹ <http://www.nicheclub.jp/>

³⁰ http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/08/15/2011081500173.html

³¹ 統計庁(2011b)。2005年版は2006年3月22日~29日に、2010年版は2011年3月30日~4月12日に世帯訪問による面接調査を実施している。

³² 保健社会研究院(2011:50-56)。「高出産、高死亡」、「低出産、低死亡」推計の順にみると、100歳以上人口は15万8385名~23万4044名に達する(2070年現在)。これを総人口及び高齢人口に占める割合でみると、それぞれ約0.5%、約1.5%となる。

³³ 統計庁(2011e)。

³⁴ ソウル大学校産学協力団(2009:26)。同調査は、94歳以上の超高齢者87名(男25名、女62名)を対象としており、厳密には現在の百寿者の教育水準を代表するものではない。しかし、超高齢者の状況から百寿者の現状を推測する資料として有効である。

³⁵ 健康状態や生活習慣に関しては、人口住宅総調査基準時点(2010年11月1日)と、百寿者世帯訪問調査時点(翌年3~4月)間の死亡者を除く分析となる(統計庁、2011b:7)。その結果、2006年は総調査対象者961名のうち796名、2011年は同1836名のうち1529名が面接調査の対象となっている。

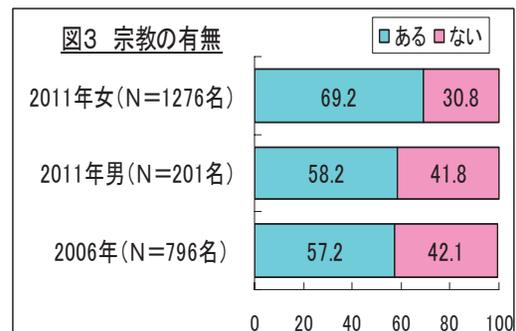
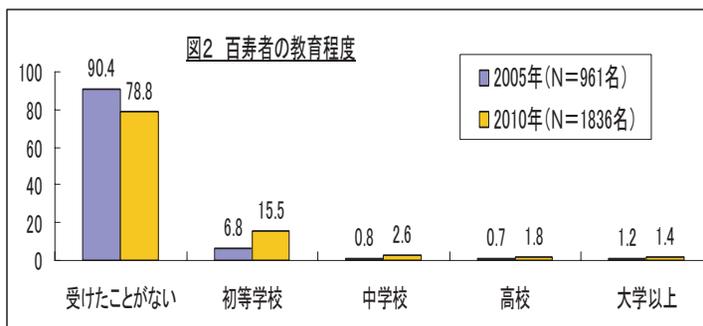
と指摘する。すなわち、長寿指標の向上には環境汚染度や保健医療サービスの充実度など地域の現状を考慮した取り組みが求められるのである。

李（2010）の研究では、水質や大気汚染程度の低さ、山菜摂取度の高さが長寿指標を高める要因であることが明らかにされ、地域環境に着目した長寿地域開発を提案されている。具体的には、自然環境の保存、特産品を地域振興の資源として活用する案である。地域の高齢者が地域特産品や薬草の加工作業場の設置、農家レストランの運営を担うこと、そして高齢者のガイドによる自然観光プログラムの開発運営等である。これらによって、長寿地域の自然環境の保全と地域の過疎化を防ぎ、さらには、高齢者の社会参加、経済的安定を図る狙いがある。

都市地域の長寿要因については、ソウル大学校産学協力団（2009）（以下、「ソウル調査」）から多くの示唆を得ることができる³⁴。ソウルに居住する百寿者は環境汚染への露出頻度が高く、長寿には相対

的に不利である。しかし、1日20種以上の多様な食品、適量の牛乳及び乳製品を摂取しているなど、長寿に有利な食習慣が観察された。従来の長寿地域での調査では得られなかった結果であり、韓国の超高齢世代の食習慣の変化を示唆するものとして注目される。

次に、百寿者の教育状況をみると、「学校教育を受けたことがない」者の比率が78.8%と極めて高い。これを2005年時点と比べると、学校教育未経験率が12ポイント程度減少し、初等学校の割合が倍増、中学校以上もそれぞれ漸増している。参考までに、「ソウル調査」から都市部の超高齢者の識字水準をみると、「読み書きができる」（男性88.0%、女性53.2%）、「読むことのみできる」（同4.0%、9.7%）、そして「全く出来ない」（同8.0%、37.1%）となっている。男女ともに相対的に高い識字率を示すものの、男女間の開き大きい点は、現在の超高齢層の世代特性として考えられる。



宗教の有無についてみると³⁵、一般的に宗教を持つ人が多く、性別では男性より女性の方が高い割合を示す。時系列でも2011年（67.7%）の方が2006年より10ポイント程度高い。宗教活動が韓国の高齢者の主要な社会参加活動であることはすでに明らかになっているが、百寿者が実際どのように宗教活動を行っているのか、また百寿者の生きがいや日常生活への影響についてはさらなる調査が待たれるところである。

百寿者が主に従事した職業についてみると（表2）、「農林漁業」の割合が49.7%（男性43.5%、女性50.7%；2006年は58.5%）と圧倒的に高いものの、2006年に比べ減少し、「販売従事者」（同15.0%、

6.0%；5.9%）やその他の職業の割合が上昇している。女性の場合は、「農林漁業」と「サービス業」にほとんど集中している上に、就業経験のない人が2006年26.1%、2011年38.1%と継続的に高い。

女性の職業経験の低さや不連続性は「職縁」による社会参加が主流となる現代においてなお指摘される現象である。家族やコミュニティーの相互扶助機能の変化、高齢者の経済的自立と社会参加・貢献が強調されて久しい。個人の高齢期における社会資源の側面はもちろんのこと、高齢社会の経済的活性化という面でも、女性及び高齢者の就業継続への配慮と状況改善が求められよう。

表2 生涯、主に従事した職業

(名、%)

| | | 農林漁業 | 販売従事者 | 単純労務者 | 事務従事 | 技能従事者 | その他 | ない | |
|-------|---|------------------|---------------|--------------|-------------|-------------|-------------|---------------|---------------|
| 2006年 | | 796 (100.0) | 466 (58.5) | 47 (5.9) | 17 (2.2) | 9 (1.1) | 39 (4.9) | 208 (26.1) | |
| 2011年 | 計 | 1,466 (100.0) | 729 (49.7) | 106 (7.2) | 23 (1.6) | 13 (0.9) | 36 (2.5) | 65 (4.4) | 494 (33.7) |
| | 男 | 200 (100.0) | 87 (43.5) | 30 (15.0) | 8 (4.0) | 13 (6.5) | 14 (7.0) | 36 (18.0) | 12 (6.0) |
| | 女 | 1,266 (100.0) | 642 (50.7) | 76 (6.0) | 15 (1.2) | 0 (0.0) | 22 (1.7) | 29 (2.3) | 482 (38.1) |

注：「不詳」10名（2006年）、「無回答」63名（2011年）を除く。

(2)百寿者の家族状況

百寿者の結婚状態をみると、死別が96.8%（1777名）と最も多いが、2005年の97.1%と比べるとわずか

ながら低減している。有配偶率も2.4%（44名）を占めており、2005年の2.2%（21名）に比べるとわずかながら増加している。

表3 居住形態別構成比（2005, 2010年）

(名、%)

| | | 計 | 単身世帯 | 家族同居 | 非血縁同居 | 老人療養福祉施設 |
|--------|---|---------------|-----------|--------------|----------|------------|
| 2005年* | | 796 (100.0) | 39 (4.9) | 642 (80.6) | 15 (1.9) | 52 (6.5) |
| 2010年 | 計 | 1,529 (100.0) | 100 (6.5) | 1,048 (68.5) | 29 (1.9) | 352 (23.0) |
| | 男 | 211 (100.0) | 24 (11.4) | 156 (73.9) | 2 (0.9) | 29 (13.7) |
| | 女 | 1,318 (100.0) | 76 (5.8) | 892 (67.7) | 27 (2.0) | 323 (24.5) |

*注：2005年の場合、不詳が1名（0.1%）であるが、本表では省略した。

次いで、現在の居住状況に注目すると、家族同居者が減少し、「一人暮らし」や老人療養福祉施設居住の割合が高くなっている。65歳以上高齢者の状況と比較すると、施設居住者の大幅な増加が見られることが特徴的である。百寿者の場合、身体機能の面で扶養ニーズが相対的に高い上に、年齢面からして「老老介護」になりやすい現実を反映していよう。家族同居の減少をめぐるのは韓国特有の世代関係の問題も指摘されている。儒教文化圏の特徴として「家族の長」の位置は

高齢者の特権でもある。しかし、親が超高齢者である場合は、ともに高齢者でありながら、その子供は「家族の長」の位置に就くことはなかなか難しく、世代間関係を困難にするという³⁶。同じ文脈から、韓国の百寿者の場合息子、とりわけ長男へのこだわりが根強い。このため、兄弟間の扶養負担の分担や娘による扶養が難しく、扶養負担が偏る、結果的に不和を招くこともしばしばである³⁷。

³⁶ チェ・ソングエ（2002）、ハン・キョンヘ外（2004）。³⁷ 同上。

表4 身体的ケアの主な担い手（2011年）

（名、％）

| | | 配偶者 | 子供・ 配偶者 | 孫・ 配偶者 | 隣人・ ボランティア | 看病人他 (有料) | 宗教・ 社会団体 | その他 | いない |
|---|------------------|--------------|---------------|--------------|---------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| 計 | 1,480 (100.0) | 31 (2.1) | 836 (56.5) | 127 (8.6) | 66 (4.5) | 475 (32.1) | 49 (3.3) | 23 (1.6) | 55 (3.7) |
| 男 | 200 (100.0) | 31 (15.5) | 109 (54.5) | 13 (6.5) | 8 (4.0) | 50 (25.0) | 2 (1.0) | 5 (2.5) | 16 (8.0) |
| 女 | 1,280 (100.0) | 0 (0.0) | 727 (56.8) | 114 (8.9) | 58 (4.5) | 425 (33.2) | 47 (3.7) | 18 (1.4) | 39 (3.0) |

注：「その他」は、その他の親戚（1.1％）、兄弟姉妹及びその配偶者（0.2％）等からなる。なお、「無回答」の49名は含まず。

百寿者の身体的ケアの主な担い手についてみると(表4)、配偶者が2.1％、子供夫婦が56.5％、孫夫婦が8.6％を占めている。65歳以上高齢者の介護期待は配偶者に高く、子世代に対して減少する傾向が続いている。しかし百寿者の場合、その年齢的特性から配偶者にはほとんど期待できず、家族介護は子供や孫世代に集約される。次に百寿者の最も大きな特徴として、看病人などの有料のマンパワーを活用している比率が32.1％にも上る点は注目すべきであろう。2005年の場合、「その他＝その他の親戚、社会福祉士、ボランティア等」として集計され、5.5％(44名)にとどまっていたのである。家族の場合は、配偶者が1.4％（11名）、子供夫婦が70.4％(560名)、孫夫婦が11.4％（91名）と高かったものであり、この5年間に子/孫世代の比率は15ポイントも減少している。この表から介護者の性別分布はわからないが、先行研究から類推すると、介護者のほとんどが女性であることは間違いない。

以上、百寿者の人口特性をみると、現状としては、女性の比重が圧倒的に高いものの、全体の量的増加とともに、男性の漸増がみられる。家族による支援状況からは、子世代への依存度が高く、孫世代が主な担い手となることが多いという、年齢要因による特性がみられた。一方変化という面に着目すると、経済的、身体的ケアをめぐる家族支援率、特に孫世代の支援率が低下しており、世代関係の縮小、公共的ケア役割の介入など、高齢者全般に起こっている現象が百寿者でも観察された³⁸。

おわりに

本稿では、重要キーワードとして浮上してきている「100歳時代」を検討する手がかりとして、100歳時代に対する大衆的な関心、政策的アプローチ、百寿者の社会人口的な実態について考察した。韓国は、急速に進む人口高齢化、超高齢者の量的増加、老後準備の不備による将来不安など、超高齢社会的局面に突入している。社会システムと個人のライフデザインの双方において、人生100年に向けた自己管理、社会的環境の見直しを迫られているのである。

このような状況の中、2011年は韓国社会において、「百寿元年」と言っても過言ではないほど超高齢社会への関心の高まりがみられた。「100歳時代」が国政の主要課題として検討されるようになったからである。韓国政府が推進する「100歳時代」プロジェクトは、「幸福な100歳時代」を目指すべく、リスク認識の共有と備えを訴え、主要中央省庁と11の政府系研究機関の連携で取り組まれた。

政府のこのような動きを受けて、各種マスコミでも100歳時代に関する特集が組まれるようになり、「100歳時代」は大衆的関心の高いキーワードとなった。特徴的なのは、従来健康長寿の象徴としてではなく、実態認識を伴う、あらゆる側面における老後準備を促す報道が多くなったことである。このような時代の変化を最も早い段階で実体化させたのは保険業界であった。保障期間を100歳以上に設定した金融商品が続出し、今後は110歳以上までに拡大することをも検討しているのである。

学問的領域では長寿要因の解明のみならず、百寿者及びその家族の日常生活、いわば百寿者のQOLに着目した研究も増加している。儒教文化圏ならではの問題として、長寿文化についての解明、家族間の世代関係への考察・配慮などについても関心が高まっている。また、長寿地域のみならず都市部の百寿者に関する研究もみられ、大衆長寿社会化を汲み取ったものとして評価できよう。一方、人生100年を生きてきた経験知や、百寿の「いま・ここ」を外部に発信できる環境はまだ活性化されていない。百寿について当事者が語る場を設けることは、超高齢社会のイメージの具体化のみならず、超高齢者のQOLの向上を図るうえでも有意義であると考えられる。

参考文献・資料

- 1) 李誠国 (2007) 『長寿老人の栄養及び食生活実態調査』慶尚北道・慶北大学校医科大学
- 2) — (2010) 『超高齢社会対備 長寿村選定及び開発』慶尚北道・慶北大学校
- 3) 韓国保健社会研究院 (2011) 「100歳対応のための未来戦略：人口及び社会保険財政の展望と課題」
<http://www.kihasa.re.kr/html/jsp/>
- 4) 金・ジョンイン (1998) 「百歳以上老人の長寿要因に対する調査研究」『保健と福祉』(1) : 9-38
- 5) — (1999) 「百歳以上老人と成壮老年層との長寿要因比較分析」『保健と福祉』(2) : 9-37
- 6) — (2002) 「百歳以上長寿老人の居住地域に対する社会環境要因」『韓国老年学』21(3) : 157-168
- 7) — (2003) 「百歳人と胃癌人の健康生活要因比較」『保健と社会科学』(14) : 233-247
- 8) — (2007) 「百歳人の地域別長寿指標と社会環境要因の影響力—2005年人口調査資料を中心に—」『韓国老年学』27(3) : 637-647
- 9) (2010) 「老人の生存百歳長寿指標に及ぼす健康要因の影響力」『保健教育・健康増進学会誌』27(2) : 109-119
- 10) 経済・人文社会研究会 (2011) 「力動的な100歳社会どう創るべきか」(「100歳時代総合カンファランス」(2011.12.8) 発表資料集) <http://www.nrcs.re.kr/info/move/index.jsp?seqno=1974>
- 11) 青瓦台 (2011.6) 「李明博政府の100大政課題」
<http://www.president.go.kr/kr/policy/data/100policy1.pdf>
- 12) ソウル大学校産学協力団 (老化・高齢社会研究所) (2009) 「ソウル百歳人研究」
http://9988.seoul.go.kr/project/business03_3.jsp
(ソウル特別市)
- 13) チェ・ソンジェ (2002) 「長寿の社会的及び心理的要因に関する探索的研究：韓国、日本及びフィンランド百歳人の特性調査研究」『韓国老年学』22(2) : 183-207
- 14) 統計庁 (2006) 「2005人口住宅総調査100歳以上高齢者調査結果」
- 15) 統計庁 (2011a) 「2010韓国の社会指標」
- 16) 統計庁 (2011b) 「2010人口住宅総調査100歳以上高齢者調査集計結果」
- 17) 統計庁 (2011c) 「2011高齢者統計」
- 18) 統計庁 (2011d) 「将来人口推計：2010年～2060年」
- 19) 統計庁 (2011e) 「2010人口住宅総調査全数集計結果[人口部門]」
- 20) ハン・キョンヘ外 (2002) 「韓国100歳老人と家族」『家族と文化』14(2) : 59-84
- 21) ハン・キョンヘ外 (2004) 「韓国百歳老人の『長生き』の意味に関する質的研究」『韓国地域社会生活科学会誌』15(3) : 121-135
- 22) 朴・サンチョル編 (2002) 『韓国の百歳人』ソウル大学出版部
- 23) 朴・サンチョル (2009) 『100歳人物語』セムト社
- 24) 朴・ヒョンスク外 (2009) 「釜山地域百歳人の日常生活遂行能力と健康関連QOL」大韓基本看護学会『基本看護学会誌』16(13) : 316-324
- 25) 「スペシャルレポートあなたが100歳まで生きるとすれば 100歳まで元気に」『エコノミスト』1007号 (2009.10.6-13号) 中央日報社 : 48-65
- 26) 保険開発院 (2011.12.23) 「急速な高齢化による保障年齢を110歳以上拡大」
<http://www.kidi.or.kr/>
- 27) 「百歳を生きる」(『京郷新聞』(1996年7月20日付))
- 28) にっち編集室「百歳の肖像」『にっち (Niche) 倶楽部』(創刊号 (1999年) ~ Vol.65 (2011・冬)) (日本語)

³⁸ 家族扶養の難しさについて、朴・サンチョルは、家族福祉はすでに期待しにくい時代であり、むしろ隣人をはじめとする地域コミュニティの開発、活性化を図る必要があると指摘する。
<http://cafe.daum.net/endorpia/HcQn/105?docid=1HSA7HCqN|105|201110106042101&q=%B9%E9%BC%BC%BC%EE%C5%A9>
(2011.01.08)